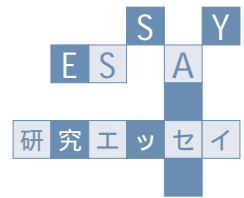




# 朝鮮時代の図像資料と風俗画

## 女性をめぐる眼差し



金 貞我 (延世大学博物館・客員研究員)

本COEプログラムが目指す幾つかの目標の一つに東アジア版生活絵引の編纂作業がある。私が主にかかわる仕事は、朝鮮時代の図像資料の中から生活の場面を示す資料を集め、韓国版の生活絵引を編纂することである。

朝鮮時代の庶民の生活を伝える図像資料としては、絵画資料として風俗画、仏画と宮廷の行事を記録した絵画の背景に点在する民衆の表現、そして農書、日記類などがあげられるが、風俗画以外の資料は意外と少ない。しかし、残された作例が比較的多いとされる朝鮮時代の風俗画も日本の近世に制作された豊富な風俗画類に比べれば、その量は決して多いとは言えない。というのは、朝鮮時代の風俗画制作の担い手は主に宮廷に属していた画院画家であり、朝鮮時代の後期に民間の工房が様々な風俗画を制作する前までは、風俗画の制作は非常に制限された範囲を越えることはなかったからである。従って、現存する朝鮮時代の風俗画は、当時の庶民の生活像を垣間見る上で極めて貴重な資料であると言わなければならない。そこで今回は、今まで収集してきた朝鮮時代の図像資料の中から、朝鮮時代の風俗画を代表する申潤福(1758~1803?)の女性の表現を取りあげ、朝鮮時代の風俗画を読み取る作業の一端を紹介することにしたい。

### 1 申潤福の描く女性とエロチシズム

申潤福の画歴は、宮廷画家で特に風俗画に優れていたということ以外はほとんど知られていない。現存する申潤福の作品は、画帖『蕙園傳神帖』(韓国、潤松美術館所蔵、国宝)の30点の他に多数の作例が伝わるが、その多くは女性を描いている。朝鮮時代の絵画作品の中でこれほど多く女性が画題とされたことは希有のことである。申潤福は、宮廷の画家でありながら卑俗な絵を数多く描いたことで画院から追い出されたと伝えられるが、彼の遺作を見ると、その伝承にうなずける。

画帖『蕙園傳神帖』の中の一点である「端午風情」(図1)は、申潤福の「卑俗」な表現を端的に表した作例で、絵は溪谷の一角で沐浴する半裸の女性たちを描く。体を露

にし、沐浴する女性の姿は、朝鮮時代を支配していた封建的な儒教のイデオロギーからみると、あまりにも破格であり、ショッキングな図柄である。朝鮮時代の絵画に稀にみるこのような大胆な表現は、ほとんどエロチシズムと結びつけて論じられている。画面の右下にさりげなく描かれた、物を運ぶ女性(服装からみて身分の低い下女であろう)も胸をさらす姿であるが(図2)この女性すらも「端午風情」のエロチシズム表現として取り扱われてきた。

ところが、封建的な儒教の道德倫理から身体を隠すことが厳しく要求された朝鮮の女性に、胸をさらすほどの露出が許されたはずはない。士大夫階層である両班の女性は自由に外出することは許されなかったし、庶民の女性ですらも肌を人にさらすことは少なかった。「端午風情」にみる、胸をさらして物を運ぶ女性の表現も、やはり、エロチシズムの表象なのだろうか。

### 2 胸をさらす女性

胸をさらす女はたびたび画題として登場する。蔡龍臣が描く「雲娘子像」は、嘉山の官妓であった崔蓮紅(1785~1846年)の肖像として伝えられるが(図3)、妓女であった崔蓮紅は洪景来の乱の時に官妓としての義理を守ったことから、妓籍から良民の身分に改められた。ところが、最も理想的な女性像を描き上げる時、画家が選択した図様は、胸をさらけ出し子供(男児であろう)を抱く姿である。この図像にはどのような社会的な約束言葉が働いたのだろうか。

朝鮮時代の女性にとって、子供を出産すること、特に男児を生産して家系を継承することは、最も重要な使命であった。同時にそれは女性を社会的に束縛するしきたりでもあった。嫁にいった女性が男児を出産できなかった場合は「七挙之悪」の一つを犯したことで、離婚の理由になる。朝鮮時代の女性における人生の最大の目標は男児を産むことであり、男児を出産した女性は女としての使命を果たしたことになる。出産後の豊満な胸は授乳

する子供がいるとの証明であり、男児を生んだ女性は堂々と胸をさらけ出し、街を闊歩できる。胸をさらす女性は、家系を支える将来の大黒柱、男児を生産した、立派な女性の表象である。

実際朝鮮時代の女性の服装は、授乳する子供を持つ女性には極端なまでに非実用的である。上半身を覆うチョゴリの丈は胸のあたりまでで、それを着るためには、胸を縛り付けなければならない。朝鮮初期のチョゴリは高麗時代の名残もあって、丈が腰の少し上までくるかなり長いものであったが、18世紀頃になると、袖は細く、丈は極端に短くなり、チマはより長く、膨らむ形になっていく。このような服装は妓女の間で流行し、後には両班、庶民にまで広がったという。朝鮮中期の革新的な女性のファッションは、男性から向けられた眼差しであり、その視線が注がれるのは胸ではなく、豊満な下半身であった。胸をさらす女性の姿は、現代の眼差しで眺めるエロチシズムではなく、儒教に呪縛された封建社会の視線と強く結びついていたのである。

胸をさらす朝鮮の女性は、20世紀初頭の朝鮮時代の風俗を伝える写真や絵葉書の中にも繰り返し登場する(図4)。欧米人や、植民地支配者の日本人の目に収まった数多くの写真には、極端なまでに短いチョゴリの下に胸をさらけ出して働いている姿がある。近代文明の観点からすれば、体のセンシュアルな部分を露出する女性の姿は、低俗・非文明に映ただろう。しかし、既婚の若い庶民の女性が胸をさらけ出すことは珍しいことではなかった。健康な出産能力の誇示であった胸をさらす姿は、育児とともに過酷な労働を強いられた庶民の女性の象徴でもあった。

### 3 韓国版の生活絵引き制作の事始め

以上、申潤福の「端午風情」にみる女性の図像を取りあげ、絵画資料のデコード作業の一例として触れてきた。韓国版の生活絵引の編纂においては、風俗画が図像資料の中心をなすことが予想されるが、その活用法には厳密に図像を読み取る作業が当然必要である。

初めて『絵巻物による日本常民生活絵引』を拝見した時の強烈な印象をいまだに忘れられない。絵巻の添景と共にあるはずの個々の図像を取り出して冷静に図柄だけに注目した、美術史研究とは異なる絵画資料の活用法に驚かされた。しかし、絵画資料から図像のみを切り取ったからといって、画家の創意から完全に自由になることはない。図像資料を視覚的に再現されたイメージとして取り扱う場合、文献資料と同様、厳格な資料批判が必要であることは言うまでもない。画家の様々な造形上の工夫によって虚実と現実の間を交差する絵は、同時代の鑑賞者には共通の言語として理解される。

しかし、時が変われば、図像が伝えるメッセージは本来の意味から離れ、たちまち迷宮に迷い込む。韓国版の生活絵引の編纂において、時の鑑賞者の視点から図像を再構築して観ることが求められる所以である。可能な限り朝鮮時代に身を置いてそのコンテキストの中で絵画資料を読んでいくこと。韓国版の生活絵引の制作の事始めにおいて、常にこの問題を意識しながら朝鮮時代の図像資料をデコードする作業に取りかかっている。

#### 参考文献

- ジョン・ソナイ『朝鮮の性風俗』(韓国、図書出版ガラム、1998年)  
 千野香織「嘲笑する絵画」(伊東聖子他編『女と男の時空』第2巻、1996年)  
 釜山近代歴史館編『写真葉書でみる近代紀行』(2003年)



【図1】申潤福筆『蕙園傳神帖』「端午風情」  
 韓国中央博物館編『風俗画』より



【図2】図1の絵の部分拡大図



【図3】蔡龍臣筆「雲娘子像」 韓国中央博物館編『風俗画』より



【図4】釜山近代歴史館編『写真葉書でみる近代紀行』より